第4回「ICT超高齢社会構想会議」議事要旨

１．日　時：平成25年5月14日（月）16：30～18：00

２．場　所：総務省11階第3特別会議室

３．出席者：

（1）構成員

小宮山座長、小尾座長代理、浅川構成員、小倉構成員、金子構成員、清原構成員、倉持構成員、近藤構成員、徳田構成員、西村構成員、広崎構成員、武藤構成員

（2）オブザーバ

内閣官房健康・医療戦略室、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付高齢社会対策担当、文部科学省生涯学習政策局社会教育課、経済産業省商務情報政策局ヘルスケア産業課医療・福祉機器産業室

（3）総務省

柴山総務副大臣、橘総務大臣政務官、桜井情報通信国際戦略局長、阪本政策統括官、谷脇大臣官房審議官、高橋情報流通振興課長、佐藤情報通信利用促進課長、吉田情報流通高度化推進室長

４．議事要旨：

（1）　開会

（2）　柴山総務副大臣挨拶

柴山総務副大臣による挨拶が行われた。

（3）　議事

①　ICT超高齢社会構想会議報告書（案）について

事務局より、資料4－2に基づいて、本会議の取りまとめであるICT超高齢社会構想会議報告書（案）についての説明が行われた。

②　意見交換

本会議の取りまとめにあたり、各構成員から以下のような意見が示された。

（浅川構成員）

・　（参考資料4－3を用いながら）高齢者がICTを使い始めるに当たってのバリアは、①メンタルバリア、②ユースケースバリア、③ユーザーインターフェースバリア、④価格バリアの4つに分類される。本報告書は、ユースケースバリア、ユーザーインターフェースバリアを乗り越えるためのツールとして有用。メンタルバリアは一番難しい課題だが、これらの3つの課題が解決されれば、価格バリアについては、新サービスやビジネスモデルが生まれて、自然に解決されると考える。

・　また、本報告書をきっかけとして、アクティブシニアを支える技術開発が盛んになり、アジア諸国やヨーロッパに我が国の技術や社会モデルが輸出されることが期待できる。提言の内容が実行されれば、ICTを使う高齢者の数がクリティカルマスを超えてビジネスとして成長していき、産業界においてもさらなる投資が生み出され、それがよいサイクルとなって、よりよい技術が実現できるのではないかと期待される。

（金子構成員）

・　（参考資料4－1を用いながら）5～6年前から遠隔医療相談を中心にしてソーシャルキャピタル（社会的つながり）の高いコミュニティを作る事業を東京都奥多摩町でやってきたが、ソーシャルキャピタルが高いコミュニティにおいては、遠隔医療相談の効果が良く表れた。また、宮城県栗原市において、ソーシャルキャピタルと健康度との関係性について調査したところ、ソーシャルキャピタルの高いコミュニティほど健康度も高いという相関関係が見られた。

・　本報告書のアジェンダとして、ソーシャルキャピタルが高いコミュニティを作るということが大きな戦略の一つになるのではないかと考える。

（近藤構成員）

・　（参考資料4－2を用いながら）現場で高齢者のICT利活用を手伝っている立場からすると、高齢者の多くはまだICTの魅力を知らない。ICTを使える人と使えない人の情報格差の解消に取組むための制度があると良い。

・　情報化が遅れている高齢の女性にICTの使い方や楽しさについて学んでもらう活動を、様々な方の支援のもと行っているので、皆さんにもぜひ協力いただきたい。

（清原構成員）

・　報告書において、国だけが取組みを進めるのではなく、「民学産公官が一体となって進める」ということを明記したのは重要と考える。

・　報告書に記載のある「健康寿命の延伸」というのは重要なキーワードであり、「平均寿命」と「健康寿命」の差をいかに埋めていくかということにICT活用の真骨頂がある。

・　高齢者がスマートに健康寿命を謳歌するという「スマートプラチナ社会」のコンセプトは、ICTを付加することで価値が増すものであり、高齢者がサービスの受け手としての受動的な立場に留まらず、サービスを生み出す送り手になるという相互性を持つようにもなる。

・　今後のプロジェクトの推進においては、推進ロードマップの実現が不可欠であり、ロードマップの実現に当たっては、地域やコミュニティを超えた「共通の基盤」を構築し、廉価なコストを実現することが重要。その際には、それぞれの地域が持つソーシャルキャピタルを生かしつつ、地域固有の課題の解決に適合的なプロジェクトを組み合わせていくことが重要。これらの観点に、「民学産公官が一体となって」という潮流が通底していくのであり、今後はプロジェクトの実現に向けた推進体制の構築が不可欠である。

（徳田構成員）

・　ロードマップの「産業創出と国際連携の推進」について、2つのフェーズに分け、どのように進めていくかについてマイルストーンを置いてほしい。第1フェーズにおいては、様々なプロジェクトを進めるにあたり、最初からシンクグローバルで、日本の中だけのモデルの確立ではなく、どういう国々へ展開できるのかという海外展開のモデルを考えながら進め、第2フェーズにおいては、国際展開を進めるにあたり、APECなど国際間の協働実証実験を行うことができれば良い。

（西村構成員）

・　報告書に、プロジェクトの推進において、利用者が楽しく利用できるということが重要という観点を入れるべきではないか。高齢者が色々なことをエンターテインメントとして楽しみ、使いこなすことで、メンタルバリアが乗り越えられ、プロジェクトが進展するのではないか。

（倉持構成員）

・　報告書において、今後の施策のポイントが提言としてまとめられたので、今後はいかに提言を具体化していくことが重要。

・　医療・介護の問題等はICTで全て解決できるものではなく、規制の緩和やルール等々、ICTの力を十分に発揮できるような環境整備を並行して進めてもらいたい。その上で、超高齢社会のニーズに応え、国際競争力のある産業創出という点で遅れをとることがないようにしていただきたい。

（広崎構成員）

・　ロードマップを進めるにあたっては、プロセスをしっかり検討し、プロセスの実現には具体的にどういう規制をどういう方向に緩和する必要があるかを発見するという、ビジネスプロセスのイノベーションが大事である。それがあって初めて国際展開の礎ができるのであるから、ロードマップの「産業創出・国際展開の推進」の部分を2つのフェーズに分けていただきたい。

・　重要なことは、共生のコミュニティをいかにICTの力で復元するかということであり、それを国際展開していく際には、日本特有の細やかさやもてなしの心というものを、理論武装した上で、前面に出し、コミュニティ再生のキーワードとして発信していけると良い。

（武藤構成員）

・　在宅医療をやっている立場からすると、高齢者の方はICTサービスの存在を知らないし、存在する様々なバリアを乗り越え、ICTを活用しているイメージが湧きにくい人もいる。一方で、家族や介護職、NPOや企業といった高齢者を支える方において、ICTを活用した取組みが十分に共有されていないが、ICTはそういった支援者の支援に大きな力を発揮すると考えられるので、ICTを活用した取組みを支援者の間で集合知として捉えるような仕組みができれば、ICTが間接的ではあっても、高齢者の支援になると考える。

（小倉構成員）

・ 医療の情報化というものは、時間的、空間的な情報を連携でき、今後はデータを蓄積することによって、どういう子供時代を過ごす、どういう青年時代を過ごすと、こういう高齢者になるということを見ていけるようになるのではないか。また、視点が都会中心になりがちだが、地方に行くほど空間的な隔絶感も大きいので、そこを埋めるのがICTの重要かつ得意なところだと思われる。

・ 報告書における「住み慣れた地域で安心して暮らせる社会」を実現するのが一番重要だと考えるが、いくつかのプロジェクトを複合的に構成し、受益する住民から見て、目に見えて良い暮らしになったというのを感じてもらえるとビジネスになっていくと思う。そのためには、特定のベンダが利益を享受することがないよう、標準化を進めていただきたい。

・ また、プロジェクトを進めるにあたっては、個人の意思をどうやって尊重して吸い上げるかということが最も重要だと考えるので、その点も踏まえて進めていただきたい。

（小尾座長代理）

・ 本報告書ができたことで、ようやく超高齢社会に関して、日本の取組みを紹介し、国際連携を行うことが可能になる。

・ ロードマップについては、高齢化がピークとなる2045年前後まで延ばして初めて国民が安心できる日本の未来像を描けると考えるので、頑張っていただきたい。また、今後の取組みとして色々挙げていただいたが、1つの役所だけではできない広がりのある話なので、総務省が各省に全面的に連携を求めていっていただきたい。

・ 成長戦略の中で、介護ロボットというのは非常に意味のある話であり、急いで取りかからなければならないタイミングになっているので、スピードアップしていただきたい。

・ グローバル展開に関して、日本のモデルを展開するにあたっては、APECやEUとの共同実証や共同対話を行っていければ良い。国際展開においては、民学産公官の連携でなければ、周りの国と競争して勝つことはできないので、是非とも連携をお願いしたい。

・ 本会議の成果を普及・推進させていくために、推進会議を作って、アクションプランや予算、規制緩和について検討していただきたい。

（小宮山座長）

・ 世界の平均寿命は、1900年までの1万年の間で24，5歳から31歳にしか延びていないのに対して、この1世紀で68歳まで延びた。平均寿命が延びたというのは、豊かな人が増えたということであり、文明の成果でもある。この文明の成果でもある超高齢社会をどうやって活気あるものにしていくかが、人類の課題であるという観点を報告書に入れると良い。

・ 本報告書や今後進めるプロジェクトについて、プロジェクト自体をICTで実装し、知りたいところをクリックすると見えるようにウェブベースでネットワーク化するという、プロジェクトの「見える化」が重要。

（4）　橘大臣政務官ご発言

最後に橘総務大臣政務官からご発言があった。

（5）　閉会

以上